

## 六 祖国に誇りを持って

高校生への講演要旨

私が、この間、特急ツバメで帰省していると、隣りにアメリカ人の老夫婦が座席を占めていました。老夫婦お揃いで世界漫遊の途次日本に立寄り、今日は東京から京都に行くのだという。お爺さんの方は無口な人ですが、お婆さんの方はおしゃべりで、隣りの私にしきりに話かけてくる。そこで私はそのお婆さんに「日本に来て、何が一番印象的ですか」と聞いたら、彼女は言下に「人の多いことです（Pressure of population）」と言った。

なるほどこの婆さんなかなか慧眼だと思った。人の多いこと、換言すれば人口問題が日本の政治、経済乃至は文化にとって、最大最深の課題を投げかけているわけです。九千万人に近い人口をこの四つの島に抱き込んでいる日本、しかも年々歳々百四、五十万人の人口が増加している日本が、どうしてこの世界に生き永らえて行くか、これが政治にとっても、教育にとっても、最初の課題であり、同時に最後の課題であるわけです。

私が敬慕している或る先輩が、「九千万の国民をどうして食べさせるかということについて明

快な回答をもたない政党や政治家は、政治を語る資格はないのだ」と私に言われました。正に冷水三斗をぶっかけられたような気持がいたしました。まことにその通りです。

秋になつて就職シーズンがまいりますと、私のところへも百数十通という履歴書がまいこんできて、私はこの頃、日夜この就職幹旋に忙殺されております。農家や商家の二男、三男のはけ口をどこに求めるか、その人達がなりわいにつくことができ、一家を構えることができ、子供を育てることができるようになったらできるか。政治の問題も窮極において、この課題に取組むことにつきるのだと思います。今諸君は向学の念に燃えて懸命に勉強されていることでしょうか。何とかして名門の学校に入学したい。あるいは何とか就職口にありつきたい。そういう不安と希望との交錯の中で苦悶と精進をつづけていることと思います。そしてわれわれの政治の課題は、何とかして諸君の希望を叶え、不安を解消できるような環境をつくり出すことにかかっていると申しても、言い過ぎではないのであります。

そこで、私は本日この課題の解明に接近する一、二の重要な問題を、諸君と共に考えてみたいと思つてあります。

先ず第一に申上げたいことは、まあこれから先きのことは、一応さしておいて、過去において、日本は年々歳々、百万人以上の人口の増加をみてきたのであるが、そういう増加人口がどうして

これまで消化されてきたものか、その過程の中に、問題を解明する秘訣がかくされてはいないかどうかを探ってみる必要があるということです。

そこで思い出すのは、ヒュー・バイヤスという人です。その人は、ニューヨーク・タイムズという大新聞の東京特派員として永く日本に滞在していた人です。この人が終戦直後、岩波書店から出ている「世界」という雑誌の創刊号と第二号に、過去における日本の軍国政策は過剰人口のはけ口を大陸への膨張に賭けたのであるが、その帰結は、過剰人口の消化に大した効果を發揮しないばかりか、大陸への輸出超過（特に資本財）という形で巨大な経済的犠牲を伴い、惹いては、日本の悲劇的な命運を招来することになった。ところがその間に増加した人口の大部分は、貿易の伸張を導因とする日本産業の拡充という形において、吸収されているではないか。これが彼の論旨であつたように私は記憶しています。

私はヒュー・バイヤスの所論に賛成です。日本の人口問題は、軍国的膨脹政策や経済的移民政策でさばきがとれるほどの小さい問題ではなく、又産児制限や家族計画によつては、これまですでに生れている過剰人口の措置にはならないものであつて、どこまでも日本産業の新しい拡充によらなければ、処理できるものではありません。過去においてさうであつたが、将来においてもこれ以外に打開の道がないと思ひます。更にこの産業の拡充によつて増加人口を何とか吸収し得

た許りではなく、国民全体の生活水準の向上までも併せて実現することができたわけです。将来も又、そうでなければならぬわけです。

そこで問題は、産業の拡充を如何にして実現してきたか、又実現していくかということになるわけですが、結論から申しますと、それは国民がとりも直さず勤儉貯蓄であつたからですし、今後もそうでなければならぬわけです。何故かと申しますと、新しい産業　それが工業である　と商業である　と漁業である　と運輸業である　との発展のためには大きい資本が要りますが、その資本は結局、われわれが日常の生計をきりつめて、余裕を貯蓄するところから出てくるものであるからです。

私は先年アメリカを三カ月ほど旅行して、過去二百年の間にアメリカという国が世界を圧する強大なる国に成長した秘訣がどこにあるかを見定めようと努力しました。資源の豊富でラウム（地域圏）の広い国は世界に類例は乏しいわけではないが、独りアメリカだけがあのような巨大な足跡を残し、今日も隆々たる発展の途を辿っているのか、ということを考えてみたわけです。

私の観察の結論はこうであります。それはどうもアメリカ人がお金を大事にするところに、その国を偉大に導いた根源があるということでした。アメリカ人は、お金を粗末にいたしません。平均してわれわれの十倍以上もの所得に恵まれたアメリカ人が、五セント玉や十セント玉という

小銭を実に大切にいたします、大切にするとすることは、これを有効に使うことです。せつせと小銭をためて、これが「塵も積れば山となる」ように、金融機関を通して巨大な資本に蓄積され、各種の産業に投資されて、今日のアメリカの経済力が出来上ったわけです。程度の差こそあれ、過去の日本の産業の発展と生活水準の向上も、結局のところ、われわれの祖先の勤労と貯蓄の賜物であつたわけです。

勿論、巨大資本の集積と巨大企業の出現ということをもたらしした資本主義経済は色々の社会問題を生んで、その是非が大きく問われているわけです。しかし、これによって労働者を含めて国民の生活水準そのものが高くなり、一步一步、文化生活への巨歩を辿ることができたことは何人も否定できません。われわれは率直に資本主義の効能を認めなければならぬと思ひます。資本主義を批判することは自由ですが、その批判は単なる空疎なる批判ではなくて、それに代るよりよい具体的な提案を含んだものでなければ一顧の価値もないわけです。現在やかましい問題になつている社会主義は具体的実践性に乏しく、まだまだ思弁の領域を脱し切れないものがあることは否めないところであると思ひます。よしこれを実行すると思ひましても、ソ連や中国における実践が示しているように極めて難渋をきわめたものになつてくるわけです。

断 想  
会 断 想  
国 断 想  
次にこの生活水準の問題ですが、その国の政治はもとより教育、科学、経済その他の領域にお

けるその国民の総合的能力が、この生活水準に結晶されていると申して差支えないと思います。然らば、わが国の生活水準はどうなっているかといえ、これを国民所得に置換えて吟味すると、国連の統計は国全体の国民所得にして世界第七位、一人当りの国民所得にして世界第十六位になつております。わが国は近く国連に加入することになると思いますが、そうすればわが国は堂々、常任理事国になるに違いないのです。又一人当りの国民所得では有色人種の中でスバ抜けて高いのであります。

今日ハイカラな人々が礼讃しているソ連や中共の国民所得、惹いては生活水準はどの程度かという、問題なくわが国より低い水準にあえいでいるわけです。ソ連や中共が新興国家として隆々と発展することは結構なことであるし、それ等の国々に学ぶべき所はどしどし学んでよいとは思いますが、それ等の国の人民の生活が今尚極めて乏しいものであることは否めないのです。私が申しました通りその国の国民の生活水準が全体として高くなければ、その国の政治や経済や文化のメリットを無批判的に高く評価するのは間違いであると思います。又文化水準の高いわが国が、わが国のメリットを忘れて、徒らに他国を礼讃することもおかしいし、文化水準の低いわが国を解放してやるとか何とか生意気なことをいうのも、慎んでもらわねばならぬことだと思ひます。

私は諸君に、われわれの先祖の嘗々たる勤勉と努力によって、敗れたりといえどもわが国が依然世界の一等国の列に列する資格を保有していることに感恩の念を新にすると共に、わが国に対する大きい誇りと自信を強められるよう希望してやまないであります。昭和二十年八月十五日、わが国は太平洋戦争に敗戦を喫しました。陸海軍は壊滅し、都市は大部分焼け、多くの同胞は死に、食糧その他の必需品は窮迫し、国民生活はメチャメチャになりました。その当時、十年たつと日本は今日のように復興すると予想した人は恐らくは一人もなかつたろうと思います。それが今日まのあたりに見る日本は、戦前以上によくなりました。鉱工業生産指数は戦前に比し一八三パーセントに飛躍し、国民の生活水準も戦前に比し農村において約三割増、都市においても約一割増という復興ぶりを示しています。戦争は多くの物的設備を焼却し滅失せしめました。しかし、日本人の精神と頭脳は、結局、これを焼き尽すことができなかつたのであります。

## 断 想 会 国

われわれの毎日の嘗為を通して、日本は、困難な問題を何とか片付けて、日本の国運は日と共に伸張しています。大きい人口問題も、過去においてもそうでありましたが、今日においてもわれわれの嘗為を通して、解決しつつあるのであります。私は、諸君に「祖国に誇りを持って」と敢て叫ぶ所以のものは、単に空疎な呼びかけではなく、わが国民のなしたげたアチーブメント（事蹟）によって、自信を以て訴えられると思うからであります。同時に、それが今日の恐るべき平

和攻勢に対する日本国民の心のとりでになる唯一のものだと思つてからであります。

諸君は次代の日本を背負い、それをよりよいものにして、その次の世代にこの日本を相続せしめなければならぬ義務と責任をもつております。日本人に生れた悦びと誇りをもつて、どうか日夜勉学に精進し、体を鍛えられるよう努力されますよう希望いたします。私のお話を終ります。

(昭、三〇・九)